

PRINTED 2024.0630

ISSN 2189-4957

PUBLISHED BY ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES

TOTAL REHABILITATION RESEARCH

June 2024

12



iStock.com / inventbart

ASIAN SOCIETY OF HUMAN SERVICES

REVIEW ARTICLE

ポストコロニアル研究の視点からソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスを再構築—文献レビューによる分析—

陳 麗婷¹⁾

1) 目白大学人間学部

<Key-words>

ソーシャルワーク, カルチュラル・コンピテンス, ポストコロニアル, ユニバーサル

chen@mejiro.ac.jp (陳 麗婷)

Total Rehabilitation Research, 2024, 12:45-60. © 2024 Asian Society of Human Services

Online ISSN: 2189-4957 / Print ISSN: 2188-1855

This is an Open Access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution

NonCommercial-NoDerivs licence (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>), which permits non-commercial reproduction and distribution of the work, in any medium, provided the original work is not altered or transformed in any way, and that the work properly cited.

I. 問題と目的

今後日本では、海外からの観光客に加えて、出入国管理法改正（平成 30 年法律第 102 号）により、日本に滞在し、また就労する外国人が増加するであろう。現在日本においては、労働人口減少により、外国人を基本的な労働人材として期待するようになった。それにより、多文化共生ソーシャルワークの必要性が従来に加えて増していくことが想像に難くない。ソーシャルワーカーも多文化を前提として、クライアントの文化を基盤としたワーカー・クライアント関係に移行することが求められるだろう。カルチュラル・コンピテンスの提唱者である Lum は、大きな「パラダイムチェンジ」である、としている¹⁾。そこで、多文化共生ソーシャルワークの中核概念であるカルチュラル・コンピテンスがさらに重要になっていくと考えられる。一言でいえば、カルチュラル・コンピテンスはソーシャルワーカーが社会的な抑圧構造を認識したうえで、クライアントの文化を尊重する姿勢ということである。後でその内容は詳述する。

そして、日本政府は、第 12 回「外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議」（令和 4 年 6 月 14 日）において、外国人との共生施策の中長期的なゴールを設定するために 2022 年に「外国人との共生社会の実現に向けたロードマップ」を決定した²⁾。そこでは、日本語教育の取り組みや、情報発信・相談体制等の強化、ライフステージ・ライフサイクルに応じた

Received
February 14, 2024

Revised
May 2, 2024

Accepted
May 4, 2024

Published
June 30, 2024

支援、共生社会の基盤整備等の4つの取り組みの方向を示した。しかし、そこにはソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスの視点が明記されていない。

カルチュラル・コンピテンスが Lum³⁾により 1990 年代に提唱されて以来、普及された。確かに Laird も述べた通り、主流文化が心を尽くしたサービスをしてそれが届かないこと、そして支援が中断してしまうことを考えれば、その文化を理解しそれに沿った支援が求められる⁴⁾。加えて Sue は先住民の宗教や祈りを尊重することが支援に役立つことを述べている⁵⁾。結果的に万能薬として認識されたように見える⁶⁾。

しかし、筆者は現実的实践場面ではソーシャルワークにおいてカルチュラル・コンピテンスのジレンマが認識されるようになってきたことを指摘した⁷⁾。そこには、5つの視点が挙げられた。

- ① カルチュラル・コンピテンスが、他文化の理解という次元で普及していることと、主流文化の抑圧の構造を深く認識することが一致していないこと
- ② 「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合する
- ③ 異なる文化に対して価値と信条の葛藤（実践者の譲れない基準の存在）
- ④ ソーシャルワーカーの価値観の土台を揺るがすこと
- ⑤ 組織としてカルチュラル・コンピテンスを展開するために、組織内で理解してくれる人材を確保して、発言権を高めるためのコンフリクトを含む動的側面

そのようにカルチュラル・コンピテンスを万能薬と捉えず、批判的に考える必要が示唆された。そのような状況で、Eliassi はスウェーデンにおける外国にルーツのある人々を支援している自治体のソーシャルワーカーたちに調査を行い、結果彼らが文化を配慮する際に不平等な社会構造について理解が乏しく、結果的に「自分」と「他者」を分離的にとらえてしまうことを示した⁸⁾。そこでは、文化的他者を主流文化のソーシャルワーカーに理解可能なものにするために、カルチュラル・コンピテンスという言説が登場したものの、現実的には原理主義的理解（主流文化を前提とする立場）に基づくものであり、「文化的マイノリティを制度的に『有能に』支配するためのツール」となる危険性を指摘している。そこでは、移民を支援する際に文化の違いが言及されるものの、主流文化を絶対視することが前提としていることを Eliassi は示唆している⁹⁾。また、Jönsson は同様にスウェーデンにおけるソーシャルワーカーに対する調査により類似の結果を示した。すなわち、ソーシャルワーカーが非西洋の人々の差異を強調し、それぞれの文化を尊重することがソーシャルワークの実践ができていないこと¹⁰⁾、である。そこで彼らが用いている根拠はポストコロニアル研究である。ポストコロニアル研究は、形式的な植民地支配が終結した段階であるにも関わらず、植民地的状況が非形式的なものとして存続しており、支配／被支配的、搾取／被搾取的、抑圧／被抑圧的な諸関係が構造的に再生産され続けている様を明らかにする概念である¹¹⁾。ソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスの検証において、支配／被支配的、搾取／被搾取的、抑圧／被抑圧的な構造的な構造化を検証する理論もあるが、問題が個人化されたり責任が抑圧を受ける人びとに帰されたりして隠されてしまうことを防ぐために、この理論は極めて有効と考えられる。

本稿ではカルチュラル・コンピテンスの意義を認識しつつ、それを補完するポストコロニアル研究の可能性について探究することを目的とする。そしてソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンスをポストコロニアルの視点から補足している研究を整理することを試みる。本稿では、先行研究の文献レビューを行い、カルチュラル・コンピテンスとポストコロニアル研究の関連性を提示したい。そしてここで得られた知見が、さらに深くカルチュラル・コンピテンスを検討して理論の再構築をする契機となることを期待している。

Ⅱ. ソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンスと ポストコロニアルの定義とその先行研究数

1. カルチュラル・コンピテンスの定義と内容

第1にカルチュラル・コンピテンスの定義と内容を確認しておきたい。

前述した Sue はカルチュラル・コンピテンスの実践について次の要素を整理している¹²⁾。

- ① 自分自身の価値、傾向、人の行動に対する考え方に対して自覚すること
- ② 多様な文化を背景に持つクライアントの世界観を理解する
- ③ 介入、戦略、技術を向上させること
- ④ カルチュラル・コンピテンスを増進もしくは阻害する組織の力を認識すること

Lum の提唱以来、カルチュラル・コンピテンスは多くの研究者に言及されるようになったが、カルチュラル・コンピテンスを議論する際に、多文化国家であるために豊富な取り組みをしてきたアメリカの、全米ソーシャルワーカー協会 (NASW) の取り組みがきわめて参考になる。

前述した NASW は「ソーシャルワーク実践におけるカルチュラル・コンピテンスに関する規準と指標」を制定した⁹⁾。その検討には前述の Lum も加わっている。これが多くの議論の集大成として、現在のカルチュラル・コンピテンスの指標として用いられている。そこでは「個人やシステムが敬意を持って効果的に、文化・言語・人種・階層・民族的背景・宗教・その他の多様性の生じさせる要因を持つ人々に対応していくプロセスである。個人・家族・コミュニティの価値を認識し、肯定し、高く評価し、個々の尊厳を認識していく」と定義している。

そして、「倫理と価値」「自己覚知」「異文化に関する知識」「異文化に対応する技術」「サービス提供」「エンパワメントとアドボカシー」「専門職教育」「言語多様性」「異文化のクライアントグループに対するリーダーシップ」「雇用における専門職の多様性」などの項目を挙げている。

以上の議論を踏まえた上で、本研究において、カルチュラル・コンピテンスを「ソーシャルワーク実践におけるカルチュラル・コンピテンスに関する規準と指標」の定義に準拠して論じていく。

2. ポストコロニアル研究

ポストコロニアル研究 (postcolonial-study) とは、植民地主義 (colonialism) あるいは帝国主義 (imperialism) の伝統が、その後 (post-) の歴史的展開において継続し、時空間を超え、精神的にも及ぼす概念である。したがって、ポストコロニアル研究は、コロニアル支配の形態が現在も存続している状況のなかで、コロニアルな状況が終わった後の秩序を創造することに示唆するものである。現在、ポストコロニアル研究やその関連の理論は文学、社会学などの領域にも取り上げられている。なお、宮崎はポストコロニアル研究を社会福祉が取り上げる理由として①社会的排除を生み出す文化へ注目することの必要性和、②移民的背景をもつ人びとの排除を、彼／彼女たちに「特有な」エスニシティの問題ではなく、歴史的な背景と福祉国家の特徴の両方において捉える、という意味での必要性という2点を挙げている¹³⁾。以下に、まずポストコロニアル研究における理論を整理しておく。

ポストコロニアル研究は多種多様なアプローチを包含しており、理論家たちは必ずしも共通の定義に同意していないという批判もある¹⁴⁾。その中でも、著名な理論家としてエドワード・サイード、ガヤトリ・C・スピヴァク、ホミ・K・バーバ、フランツ・ファノンが挙げられる。サイードはオリエンタリズム理論で最もよく知られている。サイードは、西洋と非西洋の力関係を内包する「文化」の捉え方を反省し、本質主義に対する批判をしている¹⁵⁾。スピヴァクによると、社会の下層に生きる人々を「サバルタン」と呼び、力関係の上位者が自分のポジショナリティに対する自覚が乏しいであるため、サバルタンの声が常に植民者側の研究者による代弁する現象が生じた¹⁶⁾。したがって、抑圧された人間は自分のために語ることもできない。このような過程を通して、スピヴァクは植民地主義における主体回復の楽観性を批判ながら、サバルタンを語ることの困難さを強調した¹⁷⁾。ホミ・K・バーバは植民者／被植民者の対立構造を過度に強調することで、そこから本質的かつ固定的で、均質的なアイデンティティが導き出されてしまう二項対立的なものの見方を批判した¹⁸⁾。そして、植民者の文化と被植民者の文化というのは、固定的で純粋なものではなく、被植民者が植民者の文化を、また植民者が被植民者の文化を翻訳し、模倣し、自らのものとしていく過程で、既存の権力関係が脅かされ、変化する契機となると述べている。ファノンは、差別が単に差別する側の心理機制だけでなく、その差別の構造を内面化し自発的隷従に陥ってしまう黒人の側の心理機制をも明らかにしている¹⁹⁾。

以上のように、本論文はポストコロニアル研究を踏襲しつつ、従来の社会福祉研究での理論、特にカルチュラル・コンピテンスを捉え直したい。

3. カルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルの先行研究数値の変化

以上、定義と内容を確認した上で、ここでカルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルの研究数値の変化を見てみたい（2023年4月15日現在）。カルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルの状況を概観するために、検索エンジン「Scopus」により、検索期間に制限は設けず、「cultural competence」「Social Work」「postcolonial」の両キーワードを同時にタイトルまたは抄録に含む文献として検索した。領域別に件数を示したものが表1であり、年代別に示したものが表2の通りであった。

表1より領域として、社会科学において突出していること、また表2よりカルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルへの両語とも言及が2010年よりみられることとなり、ソーシャルワーク領域でも確実に認められることがわかる。

表1 領域別のカルチュラル・コンピテンスのジレンマの文献該当数（％）

領域	件数	パーセント
医療	350	9.2
芸術	1203	31.9
心理	415	11.0
ビジネス	340	9.0
社会科学（ソーシャルワーク）	2900(80)	30.0
計	3771	100

表 2 年代別のカルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルの文献該当数 (%)

	全領域		ソーシャルワーク領域	
	件数	パーセント	件数	パーセント
1990-1999	24	0.6	0	0
2000-2009	58	15.3	0	0
2010-2014	1000	26.5	10	11.8
2015-2019	1537	42.5	45	56.2
2020-2023	1152	15.1	35	31.4
計	3771	100	80	100

III. 研究方法

1. 文献検索の方法

CiNii Articles において日本語文献でカルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルの両語を記載している文献は該当しなかった。

本研究の対象は英語で書かれた論文である。主として検索エンジン「Scopus」により、検索期間に制限は設けず、「cultural competence」「Social Work」「postcolonial」のキーワードをタイトルまたは抄録に含む文献として検索した。Scopus は、エルゼビアが提供する抄録・引用文献データベースであり、全分野（科学・技術・医学・社会科学・人文科学）の文献を収録している。

なお、「倫理的配慮」において、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程ならびに日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドラインを遵守している。

2. 文献選択基準及び除外基準

カルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルの両方について論じていない文献、会議録、考察が含まれない報告等は除外した。

3. 分析手順

カルチュラル・コンピテンスに対してポストコロニアル理論よりどのような議論がされているかについて、以下の手順で研究を選定した。

- ① 検索エンジン「Scopus」により「cultural competence」「Social Work」「postcolonial」について同時に言及している文献を抽出した。80 研究が該当した。
- ② ①で抽出した文献の中で、上記基準 2 に該当する文献を除外した。30 研究が該当した。
- ③ 上記の 30 研究を入手した。これらを精読し、「cultural competence」「Social Work」「postcolonial」の関連性について触れられているものを 15 研究採択した。
- ④ 上記 15 研究を採用し分析した。

対象文献の抽出と選定、すべての分析過程を通じ、3 人の当該領域の研究者によるスーパーバイズにより繰り返し検討を行い、信頼性と妥当性の確保に努めた。倫理的配慮として、使用した文献の明記を行い、対象となった文献から内容を抽出する際は、文献の論旨や文脈の意味内容を損なわないように努めた。

IV. 結果

検索エンジン「Scopus」により「cultural competence」「social work」「postcolonial」について検討している文献を抽出し、また上記基準に該当する文献を検索したところ、下記の15件が該当した。またさらにその検索結果を Academic Search Premier、ERIC、PubMedで把握できていない文献がないかを確認したところ、追加すべき文献はなかった。以下に4つのカテゴリーに分類した結果を示す（表 3-1~4）。

表 3-1 該当する文献の分析結果

カテゴリー1 クライアント文化に対する「自分たち」とは異なる「他者」という位置づけ

	著者/国	題目	調査方法と対象	結果の概要(アブストラクトを中心に作成)とキーワードとなる語について下線(筆者)
1	Eliassi(2015) ⁸⁾ /スウェーデン	Constructing cultural Otherness within the Swedish welfare state: The cases of social workers in Sweden	スウェーデンの3つの異なる自治体の20人のソーシャルワーカーにインタビューした。	スウェーデンのソーシャルワーカーが移民の社会問題をどのように構成するかを分析した。スウェーデンのソーシャルワークはしばしば <u>普遍主義</u> の言説を前提としているが、 <u>文化的ヒエラルキー</u> とスウェーデンの優越性という考えを生み出し、強化するだけでなく、非ヨーロッパ系移民が <u>完全な市民権</u> を享受することを許されていないため、スウェーデン社会への平等な参加を妨げる危険性もある。
2	Pitt(2019) ²⁰⁾ /カナダ	Tracing Race and Gender in Domestic Violence Social Support Work in Trinidad and Tobago.	トリニダード・トバゴのドメスティック・バイオレンス・ソーシャルサポート・ワーカーとの28の半構造化インタビューを得た。	カリブ海地域のDV社会支援サービスにおいて、 <u>racialism</u> とジェンダーに着目した。トリニダード・トバゴのドメスティック・バイオレンス・ソーシャルサポート・ワーカーとの28の半構造化インタビューを得た。ドメスティック・バイオレンス支援において、ワーカーの <u>racialism</u> が二分化(特定の人種にDVが起きるという発想)していることを前提としており、それを再生産している、ことが検証された。
3	Jönssn et al .(2018) ²¹⁾ /スウェーデン	International field training in social work education: beyond colonial divides	国際ソーシャルワーク実習を実施した、ノルウェーとスウェーデンのソーシャルワーク学生に対するインタビューを行った。	国際ソーシャルワーク実習を行った学生は批判的かつポストコロニアルな知識をもって、国際的なソーシャルワーク実習に備える必要があることを示している。多くの学生が西側中心の視点に挑戦し、 <u>内省する</u> というものである。ソーシャルワークの倫理的原則と価値観に沿った「我々」「他者」の分断を超えるべきである。

表 3-2 該当する文献の分析結果

カテゴリー2 社会的な抑圧の構造

	著者/国	題目	調査方法と対象	結果の概要(アブストラクトを中心に作成)とキーワードとなる語について下線(筆者)
4	Matoo(2022) ²²⁾ /イギリス	Othered subjects: marginalised voices of Black and South Asian mothers	ソーシャルワークを学ぶ学生にとっての交差性とクリティカルシンキングの重要性を示すための先行研究をレビューした。	黒人や南アジア人の母親という交差性を理解するためには、実践者と学生のクリティカルな省察が求められる。交差性の認識は黒人や東南アジアの女性をステレオタイプ化することに挑戦することとなる。そして、病的なものと捉えるという価値観を緩和することになる。黒人であり、女性であるという重層的な社会的不公正につながる不平等な力関係や構を理解し、問題を認識することが出来る。
5	Udah(2021) ²³⁾ /オーストラリア	Coloniality of Power and International Students Experience: What are the Ethical Responsibilities of Social Work and Human Service Educators?	クイーンズランド州南東部で質的調査を行い、日常のオーストラリアに移住したアフリカ系移民の生活体験、特に、オーストラリアに移住したアフリカ系移民の生活体験がどのようなものであったかを検証した。	調査に参加した人種差別を受けた留学生、つまり、私たちの人種差別を受けた植民地主義の力が働く文脈での、自分たちが帰属しているという感覚が得られず、権利が剥奪され、排除が続けられていると認識している。現代のポストコロニアル社会における支配と従属の生活構造において、オーストラリアの高等教育機関における差別の体系的な性質に関する洞察として、クリティカルな必要性を示唆している。植民地主義とヘゲモニーの白人の遺産についての自己省察的な認識を、ソーシャルワークとヒューマンサービスの専門職と教育で行う必要性が示唆されている。
6	Ghose (2012) ²⁴⁾ /アメリカ	Teaching About a Sex Work Community in India: Toward A Postcolonial Pedagogy	インドのセックスワーカーを教材として取り上げたクラスの学生18名を対象にインタビューした。	普遍的なソーシャルワークの価値観の妥当性と、構造的な変化をもたらさない国際的福祉の介入に疑問が生じている。インタビューした結果、学生がコミュニティに関する先入観に挑戦し、セックスワーカーの生活経験と学生が社会の変化に関与するべきであるという信条を確認することが出来た。
7	Lacey et al. (2021) ²⁵⁾ /アメリカ	Domestic Violence Through a Caribbean Lens: Historical Context, Theories, Risks and Consequences	カリブ海諸国における暴力の歴史的視点、理論、有病率、リスク、結果などの先行研究をレビューした。	カリブ海の社会でDVの発生率が増加しエスカレートしている。ドメスティック・バイオレンスのデータがないことは、政治的・社会的責任の欠如を示すものである。カリブ海の社会では、性別による格差を強調する社会的・文化的規範が、女性や子どもの暴力のリスクを不釣り合いに高めている。先行研究では暴力のリスクと結果を社会背景からの詳細な分析が欠けており、高い被害率をしめしている社会・公衆衛生上の懸念に挑戦する重要なステップも欠けている。
8	Valkonen et al. (2016) ²⁶⁾ /フィンランド	Practising postcolonial intersectionality: Gender, religion and indigeneity in Sámi social work	5人の先住民・サーミ人の女性にエンパワメントと主観性の経験に関して半構造的面接を行った。	サーミの女性たちが保守的な宗教運動であるファーストボーン・ラエスタディアニズムとサーミ文化の交差点において経験するエンパワメントと主体性を分析した。そこで植民地主義の権力関係の多様な現れと宗教と先住民族文化の相互作用を明らかにした。ここでは社会福祉における文化に配慮した研究アプローチと実践を発展させるためには、宗教的および民族的なコミットメントと構造の複雑さを理解し考慮することが重要であると主張している。
9	McKeown et al. (2020) ²⁷⁾ /イギリス	Echoes of Frantz Fanon in the place and space of an alternative black mental health centre	リバプールにあるオルタナティブな黒人精神保健センターにおいて利用者の経験に関して質的研究をした。	このセンターのサービスを受ける人々の肯定的な経験は、主流の精神保健システムにおける以前の否定的な経験と対比されている。黒人であるということと精神疾患であることで、社会からは二重の排除に会い、内面化され、個々の自己存在の意識にまで及んでいる。これらの点を踏まえた精神保健政策の必要性が挙げられる。これはファノンの批判を土台として考察している。

表 3-3 該当する文献の分析結果

カテゴリー3 ユニバーサルなソーシャルワークへの疑問

	著者/国	題目	調査方法と対象	結果の概要(アブストラクトを中心に作成)とキーワードとなる語について下線(筆者)
10	Gray et al. (2004) ²⁸⁾ /オーストラリア	The quest for a universal social work: Some issues and implications	ソーシャルワークにおける普遍主義の価値について先行研究により検討した。	ソーシャルワークの歴史的な発展や国際的な交流から生まれた共通の言説に注目しつつも、多様な多文化状況における価値観や実践に大きな格差があることに注意を喚起している。世界のソーシャルワークにおいて西洋化、地域化、そして先住民化という問題をめぐる緊張がある。これは混雑的なソーシャルワークの複雑さを明確にするためにも重要である。政治的な含みを持ちつつ、違いを許容しつつも説明責任、応答性、 <u>継続性</u> を提供する柔軟な枠組みを見出すためのアプローチが求められる。
11	Gray(2005) ²⁹⁾ /オーストラリア	Dilemmas of international social work: Paradoxical processes in indigenisation, universalism and imperialism	ソーシャルワーク専門職の原則、価値観、実践方法やアプローチの世界的な普及に関する、国家間のソーシャルワークにおける現在の逆説的なプロセスについて先行研究より探求した。	国際的なソーシャルワークにおける、専門職の原則、価値観、および実践方法またはアプローチの世界的な普及に関する、現在の逆説的なプロセスを探った。これらの活動は帝国主義的であるという理由で批判する者がいる。ソーシャルワークの土着化を強く主張する者がいる一方で、ソーシャルワークの普遍性を信じている人もいる。文化の尊重は、 <u>先住民文化を可能にし、普遍性を維持しながらも帝国主義を回避する</u> べきであるという考えを提唱する。
12	Ranta- Tyrkkö (2011) ³⁰⁾ /フィンランド	High time for ostcolonial analysis in social work	自分自身のインドでの体験により、フィンランドのソーシャルワークについて省察した。	インドは、ポスト植民地主義に関する活発な研究と議論の場所の1つであるが、北欧諸国は、多くの点で植民地主義に <u>加担</u> していた。ソーシャルワークと植民地主義との関係は、ほとんど研究されていないままであるが、本稿は、北大西洋を横切る新たなソーシャルワークの北欧の文脈においても、ソーシャルワークとその実践を理解する上でのポストコロニアルの分析の重要性を主張している。
13	Harrison(2007) ³¹⁾ /イギリス	A postcolonial perspective on language and difference in social work: bilingual practitioners working in the linguistic borderlands	出生国の植民地政策やポストコロニアル言語政策の結果に関して、オーストラリアに滞在していた3人のバイリンガル実践者のケーススタディを行った。	ポストコロニアルの視点から、ソーシャルワークにおける外国語学習履歴という問題を探求した。ソーシャルワークにおける言語理解において、英語を活用することは、ポストコロニアルな視点から、 <u>植民地主義的</u> となる可能性が示された。
14	Thomspo et al. (2019) ³²⁾ /オーストラリア	Integrating Indigenous approaches and relationship-based ethics for culturally safe interventions : Child protection in Solomon Islands	ソロモン諸島の14人の児童保護ソーシャルワーカーに対してインタビューした。	植民地後のソロモン諸島における伝統文化は、新自由主義的な市場原理の押し付けや、世界的な福祉権に基づく個人主義的な社会事業プログラムに変換しつつある。そこで以下の点が示唆された。(a) 先住民のソーシャルワークが、文化的強みを強調する関係に基づく倫理的アプローチを用いることで、絶対的(植民地的)な押し付けや怠慢な文化相対主義を回避できる(b) この発展が太平洋の社会福祉モデルに利益をもたらす可能性がある、である。

表 3-4 該当する文献の分析結果

カテゴリ-4 文化の混淆と変化の可能性

	著者/国	題目	調査方法と対象	概要(アブストラクトを中心に作成)とキーワードとなる語について下線(筆者)
15	Wendt et al. (2012) ³³⁾ /アメリカ	Rethinking cultural competence: insights from indigenous community treatment settings	先住民のコミュニティにおける2つの事例検討を行った。	民族人種のマイノリティのクライアントへの cultural competenceへのアプローチは、治療的相互作用の側面を強調して、文化を見失う危険性がある。調査事例では、グローバルな心理療法アプローチから地元の癒しの伝統まで、文化的統合性の連続性を示すものである。そこでは、 <u>本質主義と相対主義</u> のいずれかに偏らないように <u>新たなアプローチ</u> を構成する必要がある。
16	Valkonen and Wallenius-Korkalo (2016) ²⁶⁾ /フィンランド	Practising postcolonial intersectionality : Gender, religion and indigeneity in Sámi social work	5 人の先住民・サーミ人の女性にエンパワメントと主観性の経験らに関して半構造的面接を行った。	保守的な宗教的伝統があるサーメ文化の交差点におけるサーメ人女性のエンパワメントと主観性の経験を分析したところ、他の文化の接触とともに <u>彼らが変化する可能性</u> も配慮する必要がある。

V. 考察

本研究の出発点は、日本が先述のように多文化ソーシャルワークに取り組む必要性が高まり、さらに国際ソーシャルワーカー連盟のソーシャルワークの定義が変わり、「先住民の知」が言及されるようになったことに対応して、カルチュラル・コンピテンスの理論を活用する際に日本が参考にできるものがあるのかという問いであった。本研究の結果より、カルチュラル・コンピテンスに関してポストコロニアル研究の視点から論じている研究も認められる。ソーシャルワーク研究において、カルチュラル・コンピテンスに対してポストコロニアル研究の視点を含めて議論する意義が認識されるようになってきたと考えられる。この点で、以下の4つの視点が挙げられる。

- ①クライアント文化に対する「自分たち」とは異なる「他者」という位置づけ
- ②社会的な抑圧の構造、他文化の理解という次元で普及していることと、主流文化の抑圧の構造を深く認識するまでに至っていないこと
- ③ユニバーサルなソーシャルワークへの疑問の提起
- ④文化の混淆と変化の可能性

上記の文献のレビューに関して、4つの点を述べていきたい。

1. クライアント文化に対する「自分たち」とは異なる「他者」という位置づけ

Lum は、欧米文化では、分離と個人主義、自立、自律、自己満足、競争性、自己表現、主張性、成果主義、即効性、技術依存、科学中心主義、物質主義が主たる価値観であると述

べている³⁴⁾。しかし、この捉え方自体を吉原は、オリエンタリズム的思想を抱えていると指摘している³⁴⁾。

イスラム教徒のヒジャーブ問題も同様である。宮島の整理によれば、ヒジャーブ禁止の発端はフランスであり、フランス社会におけるイスラムへの偏見や不寛容は否定しがたい³⁵⁾。ヨーロッパでは東洋を他者と位置付け、女性差別や蔑視があるという見方がある³⁶⁾。そしてフランスや EU 諸国に倣い、イスラム教徒の公式場におけるヒジャーブ着用を禁止する国がヨーロッパで見られるようになった³⁷⁾。

しかし、注目すべきはフランスなどでの議論は、イスラム教徒自体を批判しているものではなく、彼らが女性を虐待しているというロジックで糾弾しているということである。樽本はフランスの公立学校での状況を次の通り整理している。「女性蔑視のシンボル」とされるヒジャーブを着用するイスラム教徒の女性は「家父長制に屈した娘」として主体性が否定され、さらに学校側の説得を受け入れない者たちは「原理主義に洗脳された娘」として排除される³⁸⁾。普遍的理念のもとで、抵抗する少数者を糾弾し、沈黙させる構造がある。人種主義とは一見無関係に見えるが、フランスでは普遍的正義に反するという理由でヒジャーブ着用を糾弾している、というものである。このレトリックは見逃せない。他方でドイツでも、「イスラムはドイツ社会の自由で民主的なルールに適合しない」という一般論が多く語られる、と佐藤は整理している³⁹⁾。しかし、9.11 事件以降、イスラム教徒への誤解が広がっていることを懸念して、Hodge は本来的なイスラム教について論じている⁴⁰⁾。また、その中で Wazni によると、ヒジャーブは抑圧のシンボルとみなされるが、しかしインタビュー結果からみれば、ヒジャーブが女性のアイデンティティにつながり、誇りを示すものでもある⁴¹⁾。

以上より、カルチュラル・コンピテンスにおいて「他者」という位置づけが生じる可能性が示唆された。

2. 社会的な抑圧の構造

他文化の理解という次元で普及しているものの、主流文化の抑圧構造を深く認識するまでには至っていないという側面がある⁴²⁾。カルチュラル・コンピテンスの概念は、性別、セクシュアリティ、宗教、年齢、能力、言語、国籍などのグループ間の違いを含むように発展してきている。その結果、これらの視点が広く普及している。前述したように、カルチュラル・コンピテンスの定義 (NASW) によれば、それは社会的抑圧に対するエンパワメントという視点も含んでいる¹²⁾。ポストコロニアルな視点を取り入れることで、人種や民族の問題に矮小化したカルチュラル・コンピテンスとならないことが必要であると示唆されている。特に、普遍的福祉国家であるスウェーデンでも、Fernandes が指摘する通り、移民に対する住宅の賃貸制限や雇用差別などの社会的不利益な構造が存在していることを考慮する必要がある⁴³⁾。この社会的抑圧の観点から、カルチュラル・コンピテンスの意義をさらに深めることができるだろう。

3. ユニバーサルなソーシャルワークへの疑問の提起

カルチュラル・コンピテンスは、欧米の普遍的・合理的なソーシャルワークが確立された上で、各文化を尊重すべきであるという視点から 1990 年代に論じられるようになった。その後、児童虐待対応においても、ユニバーサルな基準によるソーシャルワークと個々の地域の文化との間で緊張が生じることが先行研究で示されている。さらに、文化の理解と共生に

において最も難解なスピリチュアリティについても、保護的・開放的な側面と抑圧的な側面を考慮した検討が進められている。星野は、スピリチュアリティとソーシャルワークの関係性について、普遍的な権利・義務と個人や集団のスピリチュアリティを認める多様性の尊重という倫理原則の間にジレンマが生じる可能性がある」と指摘している⁴⁴⁾。

ソーシャルワークは、スピリチュアリティな動機から発展しているが、合理的な科学性を追求するあまり、スピリチュアリティと距離を置く形になった。しかしその後で、再びスピリチュアリティが呼び覚まされた。Furness et al. は、「宗教・信仰を含むスピリチュアリティは一部の人々にとって保護的で解放的かつ積極的に変容させる体験となるが、他の人々にとっては抑圧的または虐待的な体験であり得る。場合によっては両方かもしれない」⁴⁵⁾と述べている。ソーシャルワークは、人間の生を全体論として理解し支援する専門職として確立するために、このプロセスを経なければならない。そして、現在では普遍的で合理的な科学とソーシャルワーカーとクライアントのスピリチュアリティの相互作用についての省察が求められている。

さらに、ソーシャルワークにおいて国際的統一的な見解を示すことに根本的な疑問が生じることもある。例として、郷堀ヨゼフの仏教ソーシャルワークの提唱が挙げられる⁴⁶⁾。国際ソーシャルワーカー連盟がソーシャルワークの定義を示したことに対抗し、西洋生まれの専門職ソーシャルワークではなく、仏教ソーシャルワークの立場から仏教に基づくソーシャルワークの展開が提唱されている。私たちが前提としているソーシャルワークの定義に対する疑問を認識することは、逆にポストコロニアルな視点から有効な示唆を得ることができるであろう。

4. 文化の混淆と変化の可能性

ここでは、2つの側面から議論を展開したい。1つ目は、利用者のコミュニティ・グループと主流文化との混淆であり、2つ目はワーカー自身の中での揺らぎである。

第1に、ソーシャルワークが利用者の文化について語る際、しばしば一様なものとして扱っているが、実際にはマイノリティも主流文化に柔軟に適応し、発言権を高めようとする思考形態が存在する。文化として表現されるものは単一のものとは捉えるべきではなく、さらに小さなグループがあり、それぞれ異なるものである。先住民も主流文化との関係で変化する可能性があることが示唆されている。

第2に、NASWの「ソーシャルワーク実践におけるカルチュラル・コンピテンスに関する規準と指標」では、自己覚知の項目が設定されている¹²⁾。しかし、自己覚知は決して容易なものではなく、自己の価値観の土台を大きく揺るがすものである。カルチュラル・コンピテンスが基盤としている自分たちの文化を根本から再検討しなければならないことがある。文化は社会的に構成されるダイナミックなものであり、解体され変化するものである。建設的な対決、解体、および変化は、特定の文化的価値・信条・伝統を深く理解した上で、人権という（特定の文化よりも）広範な問題に関して、その文化的集団のメンバーと批判的で思慮深い対話を行うことを通じて促進される可能性がある。Yan et al. は、ワーカーとクライアントの関係において、対話によって新しい関係と意味を再構築すると述べている⁴⁷⁾。つまり、ソーシャルワーカーは文化中立性を保ちつつ、自分の世界で完結するのではなく、クライアントと共有できる世界を構築するような動態性を示唆している。ワーカーとクライアントの相互作用のダイナミズムによって、自分の価値・信条の基盤を崩させ、新しい世界を

築く可能性がある。しかしそこでは、Wendt et al. が述べている通り、異なる個々の文化に対して、原理主義と相対主義のどちらかに偏らず、最終的にソーシャルワーカーは介入の方向性を選択・決定する必要がある³³⁾。そこでは、従来ソーシャルワーカー自身が生活してきた文化を超えた世界との接触による大きな揺らぎを求めるものである。

VI. おわりに

多様性の尊重とカルチュラル・コンピテンスが今後重要な概念となるであろうことは想像に難くない。しかし以上のポストコロニアルが示唆することに照らして、さらにカルチュラル・コンピテンスの理論の再構成を図る必要性が認識される。ただし、本研究では現在まで発刊された論文の文献レビューであり、カルチュラル・コンピテンスとポストコロニアルについて述べたものを取り上げており、取り扱う言語に限られており、触れていない研究が多いと想定される。さらに十分に実践を網羅できたわけではない。加えて、その解決にむけての手がかりを十分に示すことができなかった。実践現場への調査を踏まえさらに精緻なものにしていきたい。

なお、本稿は「ソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスにおけるジレンマ克服に関する研究」(課題番号 21K01999 研究代表者 陳麗婷 2021 年度 基盤研究(C) ソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスにおけるジレンマ克服に関する研究)の助成を得ている。

文献

- 1) Lum, D. *Culturally competent practice: A Framework for understanding diverse groups and justice issues*. 2011, Brooks/Cole Cengage Learning.
- 2) 出入国在留管理庁 (2022) 外国人との共生社会の実現に向けたロードマップ, 外国人の受入れ・共生に関する関係閣僚会議.
- 3) Lum, D. *Culturally competent practice: A framework for growth and action*. Brooks /Cole Publishing Company,1999.
- 4) Laird, S. *Anti-Oppressive Social Work: A guide for developing cultural competence*. 2008, SAGE.
- 5) Sue, D. *Multicultural social work practice: A competency-based approach to diversity and social justice, 2nd Edition*. 2016, Wiley.
- 6) Jongen, C. *Cultural competence in health*. 2017, Springer.
- 7) 陳麗婷. カルチュラル・コンピテンスのジレンマに関する検討—ソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンスの再構成—. *Total Rehabilitation Research*. 9, 2021, 20-31. DOI: 10.20744/trr.9.0_20
- 8) Eliassi, B. Constructing cultural otherness within the Swedish welfare state: The cases of social workers in Sweden. *Qualitative Social Work*. 2015, 14, 554-571. DOI: 10.1177/1473325014559091

- 9) Eliassi, B. Orientalist social work: Cultural otherization of muslim immigrants in Sweden. *Critical Social Work*. 2013, 14(1), 33-47. DOI: 10.22329/csw.v14i1.5871
- 10) Jönsson, J.H. Social work beyond cultural otherization. *Nordic Social Work Research*. 2013, 3, 159-167. DOI: 10.1080/2156857X.2013.834510
- 11) 宮崎理. ヨーロッパにおける社会的排除概念:ポストコロニアルな議論との関連において. 北星学園大学大学院論集. 2014, 5, 35-47.
- 12) National Association of Social Workers. Standards and indicators for cultural competence in social work practice. National Association of Social Workers, 2015. (<https://www.socialserviceworkforce.org/resources/standards-and-indicators-cultural-competence-social-work-practice>, 2023 年 5 月 21 日参照)
- 13) 宮崎理. ポストコロニアル研究の視座から見た社会的排除:在日朝鮮人への政策の変遷に焦点をあてて. 北星学園大学大学院論集. 2015, 6, 1-11.
- 14) Loomba, Ania. *Colonialism/postcolonialism*, 1998, London: Routledge. 吉原ゆかり(訳). ポストコロニアル理論入門. 2001, 松柏社. 1.
- 15) Said, Edward. *Orientalism*, 1978, Pantheon Books. 今沢紀子(訳) オリエンタリズム. 1986, 平凡社. 265-288.
- 16) Spivak, Gayatri Chakravorty. *Can the subaltern speak?*, C. Nelson and L. Grossberg eds., *Marxism and the Interpretation of Culture*. 1988, University of Illinois Press. 上村忠男(訳). サバルタンは語ることができるか. 1988, みすず書房. 74.
- 17) Spivak, Gayatri Chakravorty. *Can the subaltern speak?*, C. Nelson and L. Grossberg eds., *Marxism and the Interpretation of Culture*. 1988, University of Illinois Press. 上村忠男(訳). サバルタンは語ることができるか. 1988, みすず書房. 76.
- 18) Bhabha, H.K. *The location of culture, 2nd Ed.*. 1994, Routledge. 本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美ら(訳). 文化の場所 ポストコロニアリズムの位相. 2005, 法政大学出版局. 410.
- 19) Fanon, Frantz. *Les damnés de la terre*. 1961, François Maspero. 鈴木道彦・浦野衣子(訳). 地に呪われたる者. 1996, みすず書房. 122.
- 20) Pitt, K. A. Tracing race and gender in domestic violence social support work in Trinidad and Tobago. *Journal of Eastern Caribbean Studies*, 2019, 44(2), 38-226.
- 21) Jönsson, J. H. & Flem, A. L. International field training in social work education: beyond colonial divides. *Social Work Education*. 2018, 37(7), 895-908. DOI:10.1080/02615479.2018.1461823
- 22) Matoo, G. Othered subjects: Marginalized voices of black and south asian mothers. *Critical and Radical Social Work*. 2022, 10(1), 109-126. DOI: 10.1332/204986021X16312856627399
- 23) Udah, H. Coloniality of power and international students experience: What are the ethical responsibilities of social work and human service educators? *Ethics and Social Welfare*. 2021, 15(1), 84-99. DOI: 10.1080/17496535.2021.1880612
- 24) Ghose, T. Teaching about a sex work community in India: Toward a postcolonial pedagogy. *Journal of Social Work Education*. 2012, 48(4), 707-726. DOI: 10.5175/JSWE.2012.201100134

- 25) Lacey, K. K. & Jeremiah, R. D. and West, C. M. Domestic violence through a Caribbean lens: Historical context, theories, risks and consequences. *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*. 2021, 30(6), 761-780. DOI: 10.1080/10926771.2019.1660442
- 26) Valkonen, S. & Wallenius-Korkalo, S. Practicing postcolonial intersectionality: Gender, religion and indigeneity in Sámi social work. *International Social Work*. 2016, 59(5), 614-626. DOI:10.1177/0020872816646816
- 27) McKeown, M. & Wainwright, J. Echoes of Frantz Fanon in the place and space of an alternative black mental health centre. *Critical and Radical Social Work*. 2020, 8(3), 323-338. DOI: 10.1332/204986019X15724516823395
- 28) Gray, M. & Fook, J. The quest for a universal social work: Some issues and implications. *Social Work Education*. 2004, 23(5), 625-644. DOI: 10.1080/0261547042000252334
- 29) Gray, M. Dilemmas of international social work: Paradoxical processes in indigenisation, universalism and imperialism. *International Journal of Social Welfare*. 2005, 14(3), 231-238. DOI: 10.1111/j.1468-2397.2005.00363.xCitations
- 30) Ranta-Tyrkkö, S. High time for postcolonial analysis in social work. *Nordic Social Work Research*. 2011, 1(1), 25-41. DOI: 10.1080/2156857X.2011.562032
- 31) Harrison, G. A postcolonial perspective on language and difference in social work: bilingual practitioners working in the linguistic borderlands. *European Journal of Social Work*. 2007, 10(1), 73-88. DOI: 10.1080/13691450601143682
- 32) Thomsson, L. J. & Wadley, D. Integrating Indigenous approaches and relationship-based ethics for culturally safe interventions: Child protection in Solomon Islands. *International Social Work*. 2019, 62(2), 994-1010. DOI: 10.1177/0020872818755857
- 33) Wendt, D. C. & Gone, J. P. Rethinking cultural competence: Insights from indigenous community treatment settings. *Transcultural Psychiatry*. 2012, 49(2), 206-222. DOI: 10.1177/1363461511425622
- 34) 吉原直樹. モダニティとアジア社会. 吉原直樹・新津晃一(編). グローバル化とアジア社会—ポストコロニアルの地平(シリーズ社会学のアクチュアリティ: 批判と創造). 2006, 東信堂. 37.
- 35) 宮島喬. フランスを問う: 国民、市民、移民. 2017, 人文書院.
- 36) 森千賀子. 反差別—独立した人権機関の設置が急務だ. 高谷幸(編) 移民政策とは何か: 日本の現実から考える. 2020, 人文書院.
- 37) 嶺崎寛子. イスラームとジェンダーをめぐるアボリアの先に. 宗教研究. 2019, 93(2), 191-215. DOI: 10.20716/rsjars.93.2_191
- 38) 樽本英樹. 排外主義の国際比較: 先進諸国における外国人移民の実態, 2019, ミネルヴァ書房.
- 39) 佐藤成基. なぜイスラム化に反対するのか——ドイツにおける排外主義の論理と心理. 樽本英樹(編). 排外主義の国際比較: 先進諸国における外国人移民の実態. 2019, ミネルヴァ書房.

- 40) Hodge, D. R. Social work and the house of Islam: Orienting practitioners to the beliefs and values of Muslims in the United States. *Social work*. 2005, 50(2), 162-173. DOI:10.1093/sw/50.2.162
- 41) Wazni, A. B. Muslim women in America and hijab: A study of empowerment, feminist identity, and body image. *Social Work*. 2015, 60(4), 325-333. DOI:10.1093/sw/swv033
- 42) Nadan, Y. Rethinking 'cultural competence' in international social work. *International Social Work*. 2014, 60(1), 1-10. DOI:10.1177/0020872814539986
- 43) Fernandes, A. G. (Dis) Empowering new immigrants and refugees through their participation in introduction programs in Sweden, Denmark, and Norway. *Journal of Immigrant & Refugee Studies*. 2015, 13(3), 245-264. DOI: 10.1080/15562948.2015.1045054
- 44) 星野晴彦. ソーシャルワークとスピリチュアリティの関係性に関する検討:科学と宗教とスピリチュアリティの対話. 人間科学研究. 2023, 44, 17-26.
- 45) Furness, S. & Gilligan, P. *Religion, belief and social work: Making a difference*. 2010, Policy Press. 井上牧子・山中裕剛・星野晴彦(訳). ソーシャルワーク実践のためのカルチュラル・コンピテンス—宗教・信仰の違いを乗り越える. 2020, 明石書店. 100.
- 46) 郷堀ヨゼフ. 西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ:仏教ソーシャルワークの探求. 2018, 学文社.
- 47) Yan, M. C. & Wong, Y. L. R. Rethinking self-awareness in cultural competence: Toward a dialogic self in cross-cultural social work. *Families in Society*. 2005, 86(2), 181-188. DOI:10.1606/1044-3894.2453

REVIEW ARTICLE

Reconstructing Cultural Competence in Social Work from a Postcolonial Perspective; An Analysis via Review Article

Liting CHEN ¹⁾

1) Mejiro University Human Department

ABSTRACT

Recently, social workers in Japan are increasingly required to transition to a worker-client relationship based on the client's culture while promoting diversity as a prerequisite. In this paper, I conduct a literature review of previous studies in social work that supplement cultural competence with a postcolonial perspective. Research that addresses the concept of cultural competence in social work while discussing it from a postcolonial perspective is now certainly recognized. Four perspectives were identified:

- (1) Positioning the "other" as distinct from "ourselves" concerning client culture.
- (2) The structure of social oppression: the prevalence of understanding other cultures and the lack of deep awareness of the oppressive structures within mainstream culture.
- (3) Questioning the universality of social work.
- (4) The blending of cultures and the potential for change.

Based on these insights, a reconstruction of the theory of cultural competence will be necessary.

< Key-words >

Social work, cultural competence, postcolonial, universal

chen@mejiro.ac.jp (Liting CHEN)

Total Rehabilitation Research, 2024, 12:45-60. © 2024 Asian Society of Human Services

Online ISSN: 2189-4957 / Print ISSN: 2188-1855

This is an Open Access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution NonCommercial-NoDerivs licence (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>), which permits non-commercial reproduction and distribution of the work, in any medium, provided the original work is not altered or transformed in any way, and that the work properly cited.

Received
February 14, 2024

Revised
May 2, 2024

Accepted
May 4, 2024

Published
June 30, 2024



TOTAL REHABILITATION RESEARCH

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Masahiro KOHZUKI Yamagata Prefectural University of Health Sciences (Japan)

EXECUTIVE EDITORS

Changwan HAN Shimonoseki City University (Japan)



Aiko KOHARA

Human-services Action for the Next-innovation
Research Foundation (Japan)

Daisuke ITO

Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)

Eonji KIM

Miyagigakuin Women's University (Japan)

Giyong YANG

Pukyong National University (Korea)

Haejin KWON

University of the Ryukyus (Japan)

Hitomi KATAOKA

Yamagata University (Japan)

Jin KIM

Choonhae College of Health Sciences (Korea)

Kyoko TAGAMI

Aichi Prefectural University (Japan)

Makoto NAGASAKA

KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)

Masami YOKOGAWA

Kanazawa University (Japan)

Megumi KODAIRA

International University of Health and Welfare
Graduate School (Japan)

Misa MIURA

Tsukuba University of Technology (Japan)

Moonjung KIM

Korea Labor Force Development Institute for the
aged (Korea)

Shuko SAIKI

Tohoku Fukushi University (Japan)

Suguru HARADA

Tohoku University (Japan)

Takayuki KAWAMURA

Tohoku Fukushi University (Japan)

Yoko GOTO

Sapporo Medical University (Japan)

Yongdeug KIM

Sung Kong Hoe University (Korea)

Yoshiko OGAWA

Teikyo University (Japan)

Youngaa RYOO

National Assembly Research Service: NARS
(Korea)

Yuichiro HARUNA

National Institute of Vocational Rehabilitation
(Japan)

Yuko SAKAMOTO

Fukushima Medical University (Japan)

Yuko SASAKI

Sendai Shirayuri Women's College (Japan)

EDITORIAL STAFF

EDITORIAL ASSISTANTS

Haruna TERUYA University of the Ryukyus (Japan)

Natsuki YANO Human-services Action for the Next-innovation Research Foundation (Japan)

as of April 1, 2024

TOTAL REHABILITATION RESEARCH

VOL.12 JUNE 2024

© 2024 Asian Society of Human Services

Presidents | Masahiro KOHZUKI & Injae LEE

Publisher | Asian Society of Human Services
50-1, Shimotsukiyamacho, Murasakino, Kita-ku, Kyoto-city, Kyoto, 603-8222, Japan
E-mail: ashs201091@gmail.com

Production | Asian Society of Human Services Press
50-1, Shimotsukiyamacho, Murasakino, Kita-ku, Kyoto-city, Kyoto, 603-8222, Japan
E-mail: ashs201091@gmail.com